

フィンランド南部、多島海エリアに行くSARGO 36。最新の2021年モデルは、サイドウィンドウのピラーがフラット化され、アフトドアとバックウィンドウもフレームレスに。レールのデザインにも変更が加えられ、アフトキャビンのウィンドウも大型化。フラッグシップにふさわしい精悍さと快適性がいっそう向上した。

SEA TRIAL

LATEST SARGO

SARGO 36

フィンボートを代表するボートブランドのひとつ「SARGO(サルゴ)」。
前傾した独特のフロントウィンドウを持ち、ネオクラシックな香りの漂うパイロットハウス艇だが、走りは別世界。
強靱な艇体とハイパワーエンジンから生み出される走りは圧巻だ。
そのフラッグシップ「SARGO 36」をフランス カンヌでシートライアル。

text: Atsushi Nomura photo: SARGO BOATS
special thanks: SARGO BOATS www.sargoboats.fi
OKAZAKI YACHTS <http://okazaki.yachts.co.jp>

40 ノットオーバーの素晴らしいパフォーマンスをみせるパイロットハウスボート フィンボート「SARGO」が誇るフラッグシップの2021最新モデル

日本でも非常にポピュラーになっているフィンランド製プレジャーボート。特に“フィンボート”の代名詞とも言えるパイロットハウス&フルウォークアラウンドデッキスタイルのボートは高い人気を誇る。前傾したフロントウィンドウ、遠目からでも分かるそのトラディショナルなスタイルは、週末の東京湾で見かけない週はないくらい走っている。2018年にフィンランドの舟艇関連の工業会「FINNBOAT」が主催するショーに招かれた際、その冒頭のカンファレンスで過去5年間のフィンランドからの輸出状況のレポートがなされた。輸出が増加した国として挙げられた中には、北欧諸国、イギリス、ドイツ、北米などと並んで日本の名前も。それくらい日本でもフィンボートが目立ってきている事実がある。

そんなフィンボートを代表するボートビルダーのひとつが、「SARGO (サルゴ)」を製造する Sarins Boats (サリンズボート) である。創業者の Edy Sarin は、フィンランドの名門ヨットビルダー SWAN の船大工出身で、1967年に独立した。以来 Sarin 家がファミリーで営み、「MINOR (ミノア)」という名前でブランド展開。2014年に現在の「SARGO」に改め、北欧だけでなく積極的な海外展開を図っている。もちろん北欧諸国や近郊のドイツなどへの輸出も多いが、現在の CEO の Thomas Sarin (Edy の息子) によると「日本も大きなマーケットのひとつ」だ。

世界でも屈指のボート所有率を誇るフィンランドでは短い真夏のプレジャーボート利用率が極めて高い。南部の波も穏やかな多島海エリアではサマーハウス (別荘) とボートがセットで用いられる。岩礁も多く、岩場のビットに直に係船する姿も見受けるし、時に浜辺にビーチングもする。アルミボートが普及するのによく分かる利用環境だ。そんな中で作られた FRP 艇は当然、並外れた強さも備えている。

SARGO のシップヤードはバルト海最北のボスニア湾に面した造船の街コッコラ (Kokkola)。真冬には海面が凍結する海、そこでシートライアルを行ったりもしているのだ。SARGO に限らずフィンボートは、その耐久



簡易な岩場のビットにロープを掛け、後ろにアンカーを入れる留め方もフィンランドでは一般的。岩に多少擦ったくらいではビクともしない強靭さが必要とされる。



パイロットハウス内は大型ウィンドウのおかげで非常に明るい。フィンボートらしいトラディショナルなイメージとモダンなアレンジがうまく融合している。トランサムゲート、アフトドア、パイロットハウス内のウォークスルーと、真っ直ぐな動線が確保されている。ナビシートは後ろ向きにすれば、ダイネットと一体化する。



Thomas CEO自らがステアリングを握り少し辺りが薄暗く涼しくなり始めた真夏のカンヌ旧港を出る。夕風の時間帯で風はほほなかつたものの、波長の長いうねりが入ってくる。操船を代わりシートライアル。搭載されたパワートレインはツインのVOLVO PENTA D6-380 DPI スターンドライブ。まずはゼロ状態からスタート。デッドスロー 600rpm で4.3kt。1,500rpm で9.2kt、2,000rpm で14.1kt、このあたりから一気に加速し始める。2,400rpm で21.5kt、2,800rpm で28.5ktに到達。さらにここから伸び3,000rpm で31.6kt、3,200rpm で35ktをマークする。巡航は2,800 ~ 3,000rpm 程度でおよそ30kt前後だ。

30kt オーバーの速度でスラロームを行うが実に素直な挙動。ややきつめのヒールを見せながらターンするので身体にかかる横方向のGは少ない。さらに回転を上げ、トリムをコントロールし、最高3,630rpm では40.5ktをマークした。少し落として3,400rpm 前後、約38kt で再びスラロームと急旋回を行う。さらにきつめに傾きながら、実にきれいに曲がる。アグレッシブな走り非常に楽しい。さすがに左舷後方がやや見にくくなるものの、首を曲げれば十分に後方視界も確保できる。せっかかうねりも出ているのであえて突っ込んでみる。時折ジャンプしながらも波当たりは非常にソフト。36フィートならではの安心感と安定感、そしてSARGOらしい走りの楽しさを実現している。耐久性と耐候性の高さも十分に体感させてくれた。

燃費は2,400rpm で3.3L/Nm、2,800 ~ 3,000rpm で3.5L/Nm ~ 3.7L/Nm、3,630rpm で4L/Nmとなっている。燃料は860L確保されており、理論上は最高速度で200マイル以上の航行が可能だ。また騒音もかなり静か。デッドスロー 600rpm では55.5dbと普通に会話ができる。加速し始めてから最高速まで73 ~ 76.5dbに収まっており、地下鉄内の80dbよりもかなり静かなレベルである。フルスロットルで走りながら隣のThomas CEOと普通に会話ができたくらいだ。

「SARGO 36」は3ドア仕様のパイロットハウスとフルウォークアラウンドデッキと言う非常に使い勝手の良いレイアウト。ブルワークトップ全周をレールが囲い安全性も高い。ハルサイドのアクセスドア部分だけはレールを無くし、便を図っている。こういった細かな配慮が、実際に乗り降りして



非常に見晴らしの良いフロントウィンドウ。高速でのターン時も十分な視界が確保されている。逆傾斜により、陽光の差し込みが少ないのも特徴だ。パイロットハウス天井は可動式のスカイライトハッチ。全開すれば心地よい風を受けながら走りを楽しめる。

性、耐候性は折り紙付き。こういったフィンボートの強靭さも日本で愛される理由のひとつだろう。

*

そんなSARGOのフラッグシップが、今回紹介する「SARGO 36」である。従来からのフルウォークアラウンドデッキを踏襲しつつ、より大型のパイロットハウスをセンターに設置。ドライバーズシートからのアクセスが良い両舷サイドドアとアフトドアの3ドア仕様だ。このモデルが2019年9月に開催されたCannes Yachting Festivalに登場した。SARGO自体、カンヌに登場するのはこの時が初。Thomas CEOによれば、やはりこれからの積極的な海外展開を加速させるにはカンヌでの存在感が必要という考えのようだ。



フォアとミジップでセパレートされたキャビンレイアウトは北欧のボートに多いアコモデーション。明るくルーミーなフォアキャビンにはアイランド型のベッドを配置。クローゼットや個室ヘッドも備わる。最新モデルで窓が大型化されたミジップキャビンには、ダブルベッドとシングルベッド。こちらにも個室ヘッドが完備され、プライバシーが守られている。

みると非常にありがたい。

スライド式のサイドドアからパイロットハウス内へ入ると、右舷にドライバースシートとナビシートが並び、左舷にパッセンジャーシート。前側の天井にフリップダウンTVモニターが設置されている。後方左舷にはカウンターギャレー、ウォークスルーを挟んで右舷にL字型ソファのダイネット。天井は開閉可能な大型スカイライトハッチで、真夏には全開にしてオープンエアを体感しながら走行できる。

L字ソファ下部のステップを降りるとロアフロア。ミッドキャビンはダブルバースとシングルバースにセパレートされ、専用ヘッドルームも用意されている。パイロットハウスの最前部にはフォアキャビンがあり、こちらはアイランドタイプのダブルベッドに、ストレージ、専用ヘッドとシャワールームが配置される。

「SARGO 36」は、2020年夏、大幅なリニューアルが実施された。今回掲載した写真はすべて最新の2021モデルだ。外観上大きく変化したの

が、パイロットハウスのウィンドウ類。すべてフラッシュ加工され、ピラーやフレーム類は大幅に細く、サイドドアのウィンドウは大きくなって、より視界が確保しやすくなっている。足許にも大型ウィンドウが設けられ、従来よりもさらに室内が明るくなっている。ダイネットの足許にストレージも追加され、より使い勝手を増すリニューアルがなされている。

最新モデルのエンジンバリエーションは、ツインのVOLVO PENTA D4-270 DPI ~ D6-440 DPIまで5種類。CEカテゴリーはB-Offshore。フライブリッジの有無、フレキシチークデッキの有無、電子航海計器のチョイスなどさまざまなオプションもある。SARGOのさらなる熟成を窺わせる魅力的なモデルだ。

*

日本のボートユーザーにも使いやすいフルウォークアラウンドデッキレイアウトは、ダイクルーズからフィッシング、各種マリンスポーツまで多様に対応可能。フィンボートならではの高い耐候性は日本の厳しいコンディションでも一定の安心感がある。次回は日本の海で、SARGOのフラッグシップを走らせてみたい。P.B.

SARGO 36

全長 11.80 m
 全幅 3.60 m
 喫水 1.10 m
 重量 8.4 ton
 エンジン 2×VOLVO PENTA D6-380 DPI
 最高出力 2×380 HP
 燃料タンク 860 L
 清水タンク 300 L
 問い合わせ先 オカザキヨット
 TEL: 西宮 0798-32-0202、横浜 045-770-0502
<http://okazaki.yachts.co.jp>



vimeo

